

近代日本のドイツ美術受容：文芸雑誌『スバル』 『白樺』『月映』をめぐって

野村，優子

<https://hdl.handle.net/2324/1806774>

出版情報：九州大学，2016，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	野村 優子			
論文名	近代日本のドイツ美術受容 ——文芸雑誌『スバル』『白樺』『月映』をめぐって——			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小黒 康正
	副査	九州大学	准教授	武田 利勝
	副査	九州大学	教授	後小路 雅弘
	副査	九州大学	准教授	東口 豊

論文審査の結果の要旨

本論文は、明治末期から大正にかけて創刊された文芸雑誌『スバル』（1909年創刊）『白樺』（1910年創刊）『月映』（1914年創刊）を考察の中心に据えながら、近代日本の西洋美術受容において「ドイツ」が果たした重要な役割を問う論攷である。

近代日本における本格的な美術批評の誕生は、1907年に始まる文部省美術展覧会を契機としながらも、実際にはドイツの美術思想に親しんだ文学者たちによって促された。しかしながら、彼らに決定的な影響をもたらしたドイツ人美術批評家リヒャルト・ムーターならびにユーリウス・マイアー＝グレーフェの著作がドイツ語原文にまで遡って検証されなかったため、本格的な美術批評成立の経緯が十分に解明されているとは言えない。事実、ドイツ語に通じていなかった高村光太郎が『スバル』1910年4月号に寄稿した美術批評「緑色の太陽」においてPERSONLICHKEITなどのドイツ語を好んで用いた理由も憶測の域にとどまっている。

以上の研究状況に対して、本論文は、『スバル』を扱う第一章において、高村が「緑色の太陽」執筆の際に木下杢太郎らの文学者たちを強く意識していたことを明らかにした。その背景として、ドイツ美術思想に依拠する文学者たちの批評活動によって日本の芸術活動が画家主導から文筆家主導へと変わりつつあった事実を論者はあげる。第二章は、更なる背景としてリヒャルト・ムーターならびにユーリウス・マイアー＝グレーフェの美術批評に触れ、特に当時の文筆家たちに愛読された後者の『近代芸術発展史』を文献学的に検証することで、ドイツに台頭しつつあったナショナリズムに抗いながら自国民に来るべき美術とは何かを説く執筆意図が日本の読者たちにも指針となったことを明らかにした。さらに第三章は、『白樺』を扱いながら、『近代芸術発展史』が実際に受容された実例を示す。同書所収の「ゴッホ論」から多大な影響を受けた『白樺』同人たちは、芸術と人類愛との間で懊悩するゴッホの姿に共鳴し、特に武者小路実篤の場合、同論に似た「ゴッホの二面」を執筆することで自身の「個人主義」へと辿り着いたのである。以上、近代日本のドイツ美術受容を美術批評の観点から追ってきた本論は、第四章において実作へと目を向け、ドイツ近代木版画受容に促されて日本の木版画が再興された過程を『月映』に追う。木版画再興に貢献した恩地孝四郎は、ドイツ表現主義、特にカンディンスキーの「イメージ」に導かれながら日本で最初に抽象表現に達したのである。

以上のとおり、本論文は、文献学の手法を用いて近代日本の西洋美術受容研究に多大に貢献する労作に他ならない。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことを認め、ここに報告する。